研究開発学校における評価（Ⅱ）

（昭和 53 年５月、教育研究開発企画評価協力者会議）

ま　え　が　き

研究開発学校における研究開発を効果的に進めるためには研究の目的・課題を明確にするとともに当初の計画の段階から適切な評価の方針・計画が確立され、その実施の過程で随時評価することが必要である。この考え方に立ち教育研究開発企画評価協力者会議は、昭和 52 年５月に研究開発の初期の段階における評価のガイドラインを作成した。

その後、研究開発学校における研究開発は進展し、その成果を取りまとめる段階に至った学校もみられることとなった。研究開発の成果を明らかにし、今後の施策に反映させるためにはあらかじめ成果を取りまとめる際の評価の観点を明らかにしておく必要があるので、ここに、研究開発の最終段階における評価のガイドラインを作成することとした。

この資料は研究開発の成果を検討・分析するために最小限必要だと考えられる事項、すなわち、研究開発の最終段階で行われる総括的な評価の内容として、必ず含められていることが期待されることを掲げたものである。研究開発学校においては、これを考慮に入れて、成果を取りまとめることが期待される。

評価の取りまとめの方針としては、特に次のような諸点に留意されたい。

１　研究開発の特徴とそのような研究開発を行った理由を研究課題に即して明確にすること。

２　研究開発の課題に応じて具体的に何をしたか、その結果、どのような効果が現れたかを明確にすること。

３　得られた研究成果はどの部分を他の学校に適用することができるか、また、適用する際の諸条件や留意すべき問題点などを明らかにすること。

４　できるだけ具体的資料・根拠を明示して説明すること（単なる意見や主張を述べたり、学説を引用したりすることに終わらないようにする）。具体的資料としては、以下のようなものが考えられるが、その中から適宜取り上げるとともに、その他にも実証的資料として適切なものがあれば引用することが望ましいこと。

(1)　各種テスト等の結果

(2)　質問紙・アンケート等による調査

(3)　児童・生徒の作文

(4)　指導の記録
(5)　教師の意見や印象
(6)　研究担当者の印象
(7)　保護者の意見
(8)　その他

5　期待した成果が挙がらなかった事例や予期せぬ副次的な影響等があった場合に、これは研究開発にとって非常に重要な情報となるので、その内容や理由等についても具体的に明らかにすること。

6　できるだけ簡潔明瞭に記述すること。

各研究開発学校においては次に示すガイドラインを参考にそれぞれの学校の実情や課題に即して研究開発を進め、最終的な報告書の取りまとめに当たることが望ましい。

評　価　の　観　点

Ⅰ　研究課題への取り組み方

（どのような考え方に立って次の各事項に取り組んだか。）

１　全体計画

(1)　どのような考え方に立って研究課題に取り組んだか。
　　また、その考え方を途中で修正する必要が生じたか。
　　その理由は何か。

(2)　研究は学校全体の教育計画の中にどのように位置付けられたか。

２　教育課程

研究課題や研究に当たっての考え方は教育課程の編成（教科・科目等の教育内容の構成及び学年別構成、時間数の配当数）に際し、主としてどういう点に生かされたか。

３　指導方法等

研究課題や研究に当たっての考え方は指導方法（児童・生徒の編成、授業の形態、授業時間の運用等）のどういう点に生かされたか。

４　学校運営

この研究の実施は学校の運営（教職員の組織や人間関係、教育委員会や運営指導委員会及び地域社会との関係等）に当たって円滑に進められたか。

５　成果の重点

この研究の成果は、研究課題との関連において特にどこにあると考えられるか。

Ⅱ　研究開発の内容

（研究開発の内容として、研究の課題に即してどのようなことが行われ、どのような工夫が施されたか。また、その適切性はどうか。）

１　教育課程

(1)　編成した教育課程はどのような特徴があったか。

(2)　教育内容の構成は次のような諸観点から適切であったか。

ア　児童・生徒の実態（発達段階、能力・適性、興味・関心等）
イ　基礎的・基本的事項の精選
ウ　一貫性・継続性（学年間・段階間等）
エ　他の教科等との連携性、関連性（総合性）
オ　柔　軟　性
カ　そ　の　他

(3)　授業時間等（週間・月間又は学期の教育計画などを含む）について特に工夫したことがあるか。どのような点か。

２　指導方法等

(1)　実施された指導方法等（授業の形態、児童・生徒の編成など）はどのような特徴があるか。

(2)　指導方法等は次のような諸観点から適切であったか。

ア　児童・生徒の実態（発達段階、能力・適性、興味・関心等）

イ　他教科・領域における指導方法との関連

ウ　前後の学年・領域における指導方法との関連

エ　柔　軟　性

オ　そ　の　他

３　施設・設備等（学校建物、教材・教具、教育機器等）

(1)　施設・設備等に関し特別の工夫、措置を講じたか。

(2)　施設・設備等は、研究課題の遂行にとって次のような諸観点から適切であったか。

ア　質・量　　エ　児童・生徒の能力・適性との整合性

イ　使用頻度　　オ　経　費

ウ　使い易さ　　カ　その他

Ⅲ　実施の効果

（研究開発の実施の結果、どのような効果が見られたか。それは、どのような資料・根拠に基づいて言えるのか。なお、望ましくない影響が生じた場合についても同様に記述する。）

１　児童・生徒への効果

(1)　研究課題や研究のねらいに対応した児童・生徒の変容が見られたか。

(2)　次の項目について具体的に変化が見られたか。

ア　学力（思考力）

イ　体　　力

ウ　生活態度

エ　学習態度

オ　自　主　性

カ　探求心・創造性など

キ　行動の活発性

ク　人間関係（児童・生徒間、児童・生徒と教師間）

ケ　学校生活や学習についての楽しみ・満足感

コ　学習上の負担

サ　その他

２　教師への効果

(1)　この研究開発で問題にしている事柄について教師の認識や態度は変化したか。

(2)　次のような諸観点について具体的に変化が見られたか。

ア　教師の児童・生徒への理解

イ　教師の教科・科目への理解

ウ　教師の考え方、指導方法等の改善

エ　教師としての満足感

オ　教師間の連携・協力

カ　教師の教育実践への意欲及び自信

キ　教師の研究及び研修への意欲及び方法

ク　その他

３　学校運営への効果

(1)　この研究開発を実施したことによって、学校運営全般にわたってどのような影響が見られたか。

(2)　次の項目について 、その運営がより円滑に行われるようになったか。

ア　職員会議、学年会等

イ　校務分掌

ウ　事務処理

エ　研究会、研究推進委員会等

オ　関係機関との連絡調整

カ　その他

４　保護者への効果

(1)　保護者や地域社会の学校に対する関心・理解・協力等に変化が見られたか。

(2)　次の諸項目について具体的に変化が見られたか。

ア　保護者会への参加

イ　保護者会での話題

ウ　学校の諸行事への協力

エ　その他

Ⅳ　研究実施上の問題点

１　計画について変更が必要となった場合に適切に対処することができたか。

(1)　問題点や変更が必要となった原因の分析は行われたか。

(2)　その他の影響の分析は行われたか。

(3)　対応策は研究開発のねらいを実現するのに有効であったか。

(4)　その他

２　今後の課題として残った問題点はあるか。

備　考

教育研究開発企画評価協力者会議では、下記の構成による評価基準等検討小委員会を設け、この資料を作成した。

評価基準等検討小委員会委員

（五十音順、○印は小委員長）

○東　　洋（東京大学教授）

梶　田　叡　一（日本女子大学助教授）

河　野　重　男（お茶の水女子大学教授）

坂　元　　昂（東京工業大学教授）

廣　瀬　　久（東京都港区立赤羽小学校長）